

毎日の保育問題 (七)

上 澤 謙 二

二二 園舎内を四まはりする

Yちゃんが頭をふつて、さうしても『お家へ歸る』といはない。

その理由は『お母さまがだまつて途中で歸つたから』といふのである。『だからお母さまが來るまでは幼稚園から歸らない』といふのである。

これは二年保育の年長組の園児で、しかもしつかりしてゐる子供である。だから勿論お母さまがついてゐることは知らないし、わざ／＼わが子にこまはつて、はつきり承知させて歸らねば泣き出すといふ不安もないわけである。現に朝方お母さまが子供といつしよに幼稚園へ來て先生と話をして、そのまゝ歸つたことは、幾度かある。それで安心して——といふよりも自然に何げなく歸つたお母さまはけ

つして再び幼稚園へ來る筈はない。だから『お母さまが來るまでは幼稚園から歸らない』となれば、恐らく一二時間もたつて『さうしたのか』と心配したお母さまが、あたふたさやつてくるまでは、この事件は解決さるべくもない。

一體Yちゃんはしつかりしてゐるだけ強情なところがあつて、殊に家庭では、自分がいひ出したことは、是が非でも通さなければ承知しないといふ傾向があるといふことを、豫て聞いてゐた。幼稚園では殆どそれは現はれなかつたが、今日はお母さまとの關係に於て起つたことなので、その點、家庭的氣分が醸されて、幼稚園では現はれなかつた持前が、さう／＼出てきたのであらう。

そこで先生は考へた。

「さうするならば、この際こそ、幾分でもそれに觸れて

指導することができるといふ機会だ。この機会を捉へてやらう」

そこで、みんな歸つてしまつてガラソなつた遊戯室の隅に椅子に腰をおろして、胸に組んだ自分の手の指を見つめるやうにしてうつつむいでゐるYちゃんのまごころへ行つて話しかけた。

『Yちゃん、さあ、お家へ歸りませうね』

うつつむいたまゝ烈しく頭をふる。

『歸らないの』

うつつむいたまゝ微動だもしない。

頑強に自己の主張に執着してゐる様子が察せられる。

さてこれをさうして家へ歸らせるか。

いきなり手を取つて引きおこして『さあ、歸るんです』といふのと同じに引張り上げて、泣いて吼えてもかまはず、さん／＼ひきづつてゆくのも、一つのやり方であらう。けれどもこれは全然強制で、子供を無理に服従させることになる。

『お母さまや先生のいふことをきかない子供はだめです。そんないけない子供は幼稚園へ來られませんが。そんな強情な子供は先生は大きらひです。さあ早くお歸りなさい。歸らなければ、先生はさてもおこりますよ』

こんなにいふのも一つのやり方であらう。けれどもこれ

は全然叱咤で、只管子供を恐れさせる結果になる。

『そんなに歸りたくなければそこにゐらつしやい。もう先生はみんな歸つてしまふから、Yちゃんひきりになりますよ。ひきりぼつちでこんな廣いまごころにゐていゝの。いまに暗くなつてから、それでも電氣はつかないし、誰もここへ來ませんよ。そして鼠がチュー／＼出てくるから。それでいいの。いやなら早く歸りなさい』

こんなにいふのも一つのやり方であらう。けれどもこれは全然威嚇で、子供を萎縮させる外はない。

『Yちゃんはお懶口ですもの、よく分かるんですもの。きつとも歸るわよ。さあ、先生はみんな目をつぶつてゐませう。その間に歸るわよ、きつとも。さあ、歸るかな。ほら、歸るかな。Yちゃんはいゝ子ね。先生達びつくりしてしまふわ』

こんなにいふのも一つのやり方であらう。けれどもこれは全然御機嫌ごり甘やかして、子供を増長させるに過ぎない。

そのいづれもが上乘でないことは明らかである。最も望ましいのは、Yちゃんが幼児なりに自己の考慮、動機、意志によつて一言でいへば自發的に家へ歸ることである。保育者としては、出来るだけこれに近い状態を導き出すことに力めねばならない。

そこで先生は一きわYちゃんのそばへ寄り添つて話しはじめた。

『ねえ、お友達はみんな歸つてしまつたでせう。子供でここにゐるのはYちゃんひとりよ。たつたひとりであるて面白い。面白くないでせう、つまらないでせう』

親しさは失はないが、一語々々念を押すやうにしていふ。それは現在のYちゃんの心境をはつきりその本人に示して、出来るだけ明らかに自覺させるための説明だからである。中に「面白い?」といふやうな質問の型式を挿入したのも、自覺を強める手段である。それに對して答へなくともよい。到底答へるやうな輕快な心持にはなつてゐないのだから、そのまゝあまの言葉をつゞける。けれども答へないにしても、單なる敘述型よりもYちゃんの心にひびくこと、從つてそれだけ自覺を促す力があることは争へまい。そこでちよつと奥の手を出してゐる。

『Yちゃん、お家へ歸る。』

けれどももうつむいたまゝだまつてゐる。

『じゃあ、先生は幼稚園の中を一まはり廻つてくるから、その間にYちゃんね、歸るか歸らないか、よく考へてよ。さうして歸るこきめたら、先生がいつしよに行つてあげませうね』

「いつしよにゆへ」は、この場合「歸りよくする」補助手

段である。要するに「歸ることがよい」を自分で分かつて「歸る」を自分で決定することが眼目である。だからこの眼目を實現するためには「自發的たること」を傷つけない程度に於て、間接的な誘導を講ずることは許さるべきであらう。

かういふやうにしてしばらくひきり残すことは、一種の約束を時間的條件を課して、おのづから明確に考へ又可及的に早く決しなければならぬ状態に置くことであつて、間接の他動的按排によつて、知らず識らずのうちに直接な自發活動を喚び起す試みに外ならないのである。

やがて一巡して歸つてきて聞く。

『じゃあ、Yちゃん、いつしよにゆきませう』

けれどもまだうつむいたまゝだまつてゐる。殆き前も變りありとも見えぬ。

それで更に局面を轉換して話を進める。

『お母さまはお家で、Yちゃんが歸るのを待つてゐるでせうね。』さうしてまだ歸らないんでせう。もうきつゝ歸つてきますよ』つていつてゐらつしやるでせうね。Yちゃんが歸るよ』まあ、お歸りなさう』つて、それはおよろこびになりますよ』

これは前の説明に對照的の意味をなす。幼稚園にひきりゐることが、いかにつまらないかといふのに對して、家へ歸ることが、いかに喜ばしいものであるからいかにいふやうに出

来るだけ實感的に示して、Yちやんの心をお家の方へ向けさせ、歸らうとする意欲を起させようとする試みである。

そこで又ちよつと奥の手を出してみる。

『だからお家へ歸る。』

けれどもやはりうつむいたまゝだまつてゐる。

『ちやあ、先生は又幼稚園の中をまはつてくるから、その間によく考へてよ。今度は歸るべきめるかな』

さういひ置いて、再び一巡して歸つてくる。

『さあ、Yちやん、いつしよにゆきませう』

顔を擧げてちよつとこつちを見たが、すぐもこの通りについてだまりこんでしまふ。それで又局面を轉換して肉薄する。即ち答へねばならないやうな質問を發するのである。

『Yちやんが元氣で幼稚園から歸るよ、お母さまは何か下さる。』

するまゝうつむいたまゝだが、答があつた。

『下さる時も、下さらない時もある』

『さう、今日歸つたら下さるかしら。お母さまが先へ歸つても、泣いたりなんかしないで歸るよ、きつと何か下さるでせう』

歸らうとする動機を構成するため、更に具體的な誘因を提供しようとする試みである。そこで三度奥の手を出してみる。

『ね、だから歸りませう』

Yちやんはちらつとこつちを見たが、うつむいてだまりこんでしまふ。けれども、さつき答へたことゝ、今、ちらつとこつちを見たことゝは、明らかに心の結核れが少しゆるんできたことゝ、もしくはほぐれかゝつたことを反映するものさういへやう。

『ちやあ、先生はもう一度まはつてきますからね、今度はYちやん、歸るついでいふのでせう』

さういひながら軽く肩へ手をかけるさ——これは意外！かすかながらたしかにコックリした。

『まあ、よく分かるわね。ちやあ、まはつてくるわよ』

幼児はなべてさうだが、轉回するとなれば、發展するとなれば、大人が思ふ以上に顯著に活潑に轉回し發展する。

このコックリはかすかではあるが、もう一度まはつてくれれば正に好ましい結末になることを約束するものである。

先生は大いそぎで四度まはつてきた。

『ちやあ、歸りませう』

案の定！ 今度は素直にコックリするさ、ちよつと出した先生の手へ、早くもしつかりつかまつた。間髪を容れず、そのまゝ兩人は歩き出す。

廊下、下駄箱、玄関、御門——すら／＼と過ぎて、表へ出た。表へ出れば、日はうららかに空は廣い、家の中は別世界だ。

そのやうに今までの紛紜はきつぱり絶縁して、新しい氣持になつて、お家の門をくぐらねばならぬ。

「Yちゃん、いつもぎつちの横町から来るの。その通り先生を連れていつて教へてちやうだい」

この言葉は即ち空氣轉換、新氣分醸成の第一聲である。

「いつてよ」

Yちゃんはさういつて、あべこべに先生の手をひつばるやうにして、角をまがつた。

「まあ、あの電信の針金に雀がさまつてゐるわよ。何羽

？」

『五羽』

「あら、犬が来た。かはい、犬ね。Yちゃん、知つてる犬？」

「知らない」

さつきの事件は全く無關係なこんな會話を交はしつゝ、ゆく。

「お手々つないで、野道をゆけば」

曳いた手を心持振つて、先生がうたふきもなく小聲で口づさむと、Yちゃんはひびきの物に應ずるやうにすぐそれに和してうたひ出した。

「みんなかはい、小鳥になつて、歌をうたへば靴が鳴る」

一節二節を幾度かくりかへすと、Yちゃんの家の門が見えてきた。やがて門をはいると、Yちゃんは先へかけていつて、むしろ誇らしげに大きな聲で報告した。

「お母さま、〇〇先生がいちしたの」

「まあ……」

お母さまはやゝ怪訝な顔をして出てきた。

先生は玄關のタ、キへ立つたまゝ、ごく簡単に次第を話して、かうつけ加へる。

「どうぞ今日はこのごきは何かいいはないでください。改めてそれを取上げて叱らないでください。拗ねたのはいけなかつたけ、それを自分で思ひかへして、自分でやめたのですから、それは本人に取つては大變な努力なのですから、それを察してやつてください。さうしてその努力によつて好ましくない傾向に打勝つたのですから、それを認めてやつてください。先生がね、Yちゃんは、今日はいふことをよくきいてその通りにしましたつて、おつしやつてゐたわよ。何でも先生のいふことをきくのはよい子供ね。」

「いふやうにおつしやつてください。さうして何か、お菓子か果物でもちよつしやつてくださいれば結構ですけ」

それはさつき「元氣で幼稚園から歸つた時は何か下さる？」と聞いたそれに、おのづから照應させる意味である。

そのごきもちよつといひ添へる。

「さやうなら、Yちゃん」

「さやうなら」

「さやうなら」

「さやうなら」

「さやうなら」

ホツミした氣持で門を出た先生は、道のあるきながら胸の中でいつた。

『萬事完了』

思はずほゝゑみが顔に上つてきた。